

高電圧源による被害の軽減に関して

J.F

2008 年 3 月 18 日

目次

1	スパーク、コロナ放電による被害の軽減に関して	1
1.1	被害による感情の操作に関して	15
1.2	脳波（思考）盗聴、音声送信被害に関する考察	16
1.3	ニューロフォンとの関連に関して	19
1.4	音声送信被害と被害による振動感に関して	22
1.5	アンテナのサイズに関して	24
1.6	メモ	25

1 スパーク、コロナ放電による被害の軽減に関して

執筆開始 2007 年 11 月 8 日

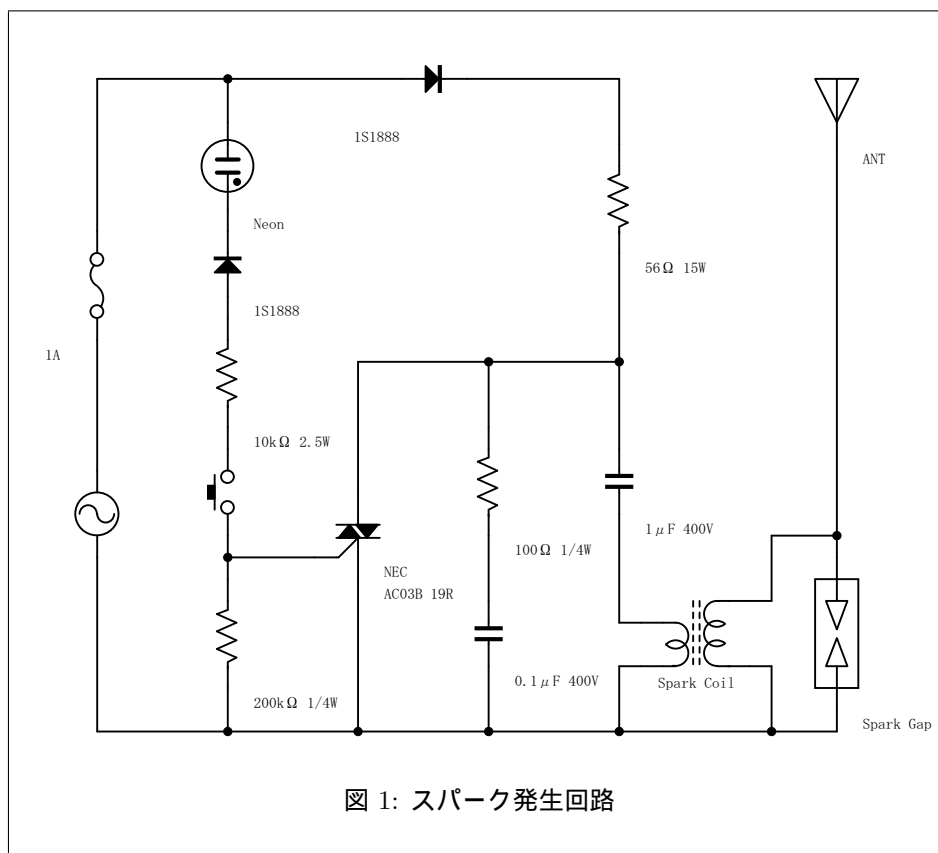


図 1 は、バイクのスパーク・コイルを利用して高電圧を発生し、スパークを発生する事のできる回路です。プッシュスイッチを押す事で毎秒 50 発の高電圧スパークを発生する事が可能です。部品のサイズ、電力損失等を適切に選択する事で連続運転が可能です。スパーク音は昼間は気になりませんが、深夜はかなり大きく感じられます。

この回路を用いてスパークを発生させると、加害者は確実に反応します。一時的に被害が増大しますが一時的なもので現在の所、実害はありません。むしろ被害が重い時に用いる事で被害を軽減できます。

スパーク・ギャップの間隔を調整する事で、効果が異なる事が分かって来ました。ギャップの間隔を大きくする事で、スパーク音は増大しますが、更に、間隔を増す事でスパークの発生が失敗し、代わりにコロナ放電が発生します。この時、聞かされている音声に変化が生じ、音声の高域部分が減少し、同時に音量も下がり被害が激減します。声の内容も一方的な内容が多くなり、意思疎通のある音声被害が停止します。不思議な事です。(脳波、思考?) 盗聴機能に何らかの影響が発生したからと思われるのですが、正確な所は不明です。

回路構成から、毎秒 50 回のスパーク(高電圧放電)が発生していますが、これは以前に観測された人体に発生している不思議な電圧振動とぴったり重なります。

犯人が被害者の人体に電磁パルス¹⁾を用いて、更に、PWM 変調により低周波の電圧を発生させている可能性がある事から、犯人が発生させている電圧に、ノイズが乗る為に、犯人が使用している盗聴器、音声送信機に、何らかの誤動作が起きていると予測できます。少なくとも激しい音声送信からは開放されます。

¹⁾電磁ノイズの観測と分析の結果、波長サイズに特徴が存在し、マイクロ波以上の高周波帯域と予測できる。マイクロ波、テラヘルツ波、X線等

スパークが発生せずに、コロナ放電が発生した時の音は、ジー、ジーと言った感じの静かな音で、更に、かなりきついイオン、オゾン臭がします。体には良くないと思われませんが、コロナ放電が起きている時には、声被害が激減しますから、オゾン臭は我慢して喚起に注意しています。マイナスイオン発生器を使う事で、被害を軽減できる事と符号すると思われませんが、イオン発生器として考えると、桁違いに強いイオン、オゾン臭が発生しています。

可聴している音、思考、に激しく共鳴する、音被害、声被害が、消滅する事の発見は、世界的に見てもこれまでに存在していませんから世界初の大発見だと思います。

恐らく、人体に高電圧を発生させる事が、加害行為の基礎的な技術である為に、加害装置は高電圧のノイズに弱い装置なのだと思います。

明確な事は言えませんが、デジタル・ニューロフォンの翻訳を読んだ記憶と符合します。もしそうだとすると、意外に簡単な原理でデジタル・ニューロフォンによる攻撃をかわす事ができるものです。

装置の開発を行う事で、防衛装置はできると確信しました。しかし、高電圧を扱う回路ですから開発にはかなりの危険が伴います。電気回路の知識が無い限り無理です。そう言う私も、恥ずかしながら何度か感電していますが、感電の仕方によっては、命の危険を実感していますので、専門知識の無い方は絶対に止めてください。非常に危険ですから、専門知識のある方に相談される事を薦めます。

現在の所、手でスパークを発生させていますが、スパークを発生させる、時間間隔を変える事でも、声被害が確実に変化します。0.5～1.5秒止めて、0.2～0.5秒連続してスパークを発生、これを繰り返す事で、声被害がまったく気にならない状態になります。声被害の内容が、一方的に捲し立てる感じで、予め録音してある物を、一方的に再生している状態に変化します。つまり、単語の羅列が聞こえるだけの状態に変わります。

声被害の内容をメモする事で、声被害が完全に停止したと証言する被害者が居ましたが、恐らく、声被害の内容に問題がある為に、中止せざるを得ない事情から、被害が無くなったのだと思います。これは、同じ内容の繰り返しがある為に、メモを取られる事を、恐れるのではないかと予測できるのです。高電圧スパーク、或いはコロナ放電を発生する事で、声被害の内容は、意味不明の単語の羅列になります。つまり、一定の範囲の単語と、笑い声が正確に繰り返されているだけの状態です。

高電圧発生部分の形状が非常に重要であり、微妙な調整が要求される事から、電界の分布に条件があるように思われます。文字通り、デジタル・ニューロフォンのように、高電圧が人体に加わる必要があるのかも知れません。現在使用している装置でも、かなりの電圧が人体に加わっている事が分かっています。

鉄板を用いて防衛を行う事で、犯人が照射している電磁パルスにより、鉄板に高電圧が発生しますが、その高電圧が、鉄板の電磁波伝播特性により変調されます。鉄板に発生した高電圧は、明らかに変調を受けますので、犯人からすれば、余計なノイズが発生する分けです。つまり、自ら放った電磁パルスにより、妨害を受けるのです。

私の場合は、鉄板を用いてはませんが、鉄板を用いて防衛している被害者の証言では、声被害がまったく無い状態に出来たと聞いていますので、鉄板を使用して、声被害に対する防衛が可能な理由として、十分な原理と考えています。しかし、鉄板を使用して防衛を行う場合、明らかに電磁シールドとして機能する事も確かです。これらの事から予測できるのですが、厚さ10ミリの鉄板を用いるよりも、1ミリの鉄板を十枚重ねの方が、複数の意味で合理的だと考えられます。

高電圧スパークを利用した加害に対する防衛は、開始してから時間が短い為に明確な事は言えませんが、観測を続ける事で、音声被害を解決できる情報が得られるものと考えています。取り敢えずは、テスラー・コイルを作成して、現在よりも更に電圧を上げる予定です。

最初の段階では、高電圧発生回路にスイッチを設けましたが、現在はスイッチを外して連続運転しています。

この文章を書き始めの頃から少し経過しましたが、徐々に分かって来た事としては、コロナ放電が発生する時に、電磁ノイズと音波振動が生じている事です。この電磁ノイズは、AMラジオ受信時に多少のノイズが聞き取れる程度のもので、ラジオを1メートル程度離す事でノイズも聞き取れなくなります。しかし、加害者は、音声送信が行えないほど混乱しているのが分かりますし、事実それまでの凄い音声被害は消滅してしまいました。

コロナ放電により、思考？脳波？盗聴器に、かなりのノイズが発生している筈です。コロナ放電が発生する時に、耳を近づけますと、バリバリとした音が聞こえますが、これは、放電音と共に、微細な振動が発生している証拠です。人体頭部の、マイクロ・バイブレーションを盗聴していると仮定しますと、この電磁ノイズと、共に発生しているコロナ放電による、音波と、電界の振動は、盗聴を妨害する能力を持つ筈です。

実は、人体に直接放電が起きるように、コロナ放電を行いますと効果絶大です。この時、人体には数万ボルトの電圧変動が発生しています。全身から、空間に対してコロナ放電が発生していますので、身体の振動を盗聴する事は、かなり難しいと考えられるのです。

犯人が、被害者の身体に、高電圧を発生させている事が、これまでの観測と分析から判明していますので、犯人が発生させている電圧変動が、犯人の思うようにならない為に、音声被害が消滅したとも言えそうです。しかし、この防衛方法の場合、明らかに相乗効果が存在すると思いますので、どの原理が一番効果的に作用しているのか、現時点では不明な事も確かです。

装置を開発されようと考えている方は、安全な装置が開発されるまでは、安易な実験は行わないで下さい。命を失ってしまっただけでは何にもなりませんから。

可能性としては、人体に直接放電を行わなくとも、人体を困るように衝立障子を施し、これに対して電圧を加える事で、同様の効果が得られる筈です。工夫次第では、安全に使えるように装置する事ができると考えています。

それにしても不思議な現象があるものです。高電圧を身体に加える事で、声被害がまったく気にならないようにできるのですから、この被害に遭った時程の驚きではないにしろ、発見の連続と言った所です。声被害の原因と、集団ストーカー被害が、完全に究明される事を望んでいますが、これに比べれば小さな発見に過ぎないと言った所でしょうか。しかし、小さな研究の積み重ねが必要な事も確かです。

新たにアンテナを工夫する事で、音声被害が安定して停止する事が分かって来ました。

アンテナの等価回路としては、コイルとコンデンサーが直並列に繋がっている状態と考えられますが、周波数帯域が超高周波帯域と考えられる為に、集中分布では無く、分散分布型と考えねばなりません。という事は、アンテナが、自動的に、無数のプラグの代わりになっているのです。2メートル程の長さのアンテナからは、先端部分でも確かにコロナ放電を確認できます。分かりやすく言い換えると、テスラーコイルの、二次コイルと同じような構成になっている分けです。

このアンテナに、十分に高電圧がチャージされた直後に、スパークが発生しますから、急峻な電圧変動が発生し、かなりの高周波帯域にまで、電磁ノイズが発生している筈です。アンテナの長さを含めた、物理的な形状が重要になって来ると考えられますが、現在は、普通の電線を繋いでいるだけです。

2メートルの普通の電線に沿って、無数の放電プラグが並んでいるのですから、さぞかし凄まじいノイズかと言えば、実際の所、FM ラジオとテレビ受信時には、殆どノイズを確認できません。AM ラジオと、短波ラジオに、多少のノイズが聞かれる程度ですが、送信アンテナの数メートル以内ではAM ラジオは機能しません。

この事から、犯人が受信している電磁波の周波数帯域は、比較的低いとの仮定も成り立ちます。一見すると以前の観測結果と矛盾していように観ぜられますが、超高周波の電磁パルスで、PWM 変調して、低周波を発生させていると考える事で矛盾せずに説明が可能です。

また、以前の調査で、被害者が録音した波形の声紋(スペクトログラム)に、異常が発生している事が判明していますが、この事も、低周波帯域に異常な高電圧の電圧変動が生じている事を示唆しています。

防衛の為に製作した、ノイズ・ジェネレーターを停止すると、途端に、凄い音声被害が感じられます。

この音声被害(加害装置)は、明らかに共鳴現象を利用しています。

被害者(私)が可聴している音に連動する形で、激しく共鳴する振動波? 振動音が、はっきりと聞き取れません。

確かに、脳波を盗聴するシステムが存在している筈ですし、脳波盗聴と、音声送信システムが、連動したフィードバックのあるシステムが成立していなければ、説明の付かない現象が生じています。

声被害は、人体に発生している50サイクル(関西では恐らく60サイクル)で繰り返されるトーンバースト波により発生していると予測しています。

作成したノイズ・ジェネレーターと完璧に共鳴していますし、20メガオームの入力インピーダンスを持つバッファアンプを用いて、人体に発生している電圧を計測した結果、不審な電圧変動が確認された事と符合しているのです。共鳴が発生している事が分かる原理は、フーコーの実験と同じです。

断続音を連続音として、二つの音の差、和(ビート)の物理的に存在していない音を聞き取る事のできる脳の錯覚を悪用し、更に、商用電源に同期した偽装がなされていると予測しています。この事は、人体に発生している電圧変動から明らかになりつつありますが、遅かれ早かれ正確な解明がなされる事と感じています。

音声被害が停止して感じる事は、露骨な嫌がらせがエスカレートしたに過ぎないと言う事でしょうか。技術的にはともかくとして、非常に程度の低い行いであり、馬鹿げた盗聴システムです。何しろ、盗聴に対する防衛法を知っている者には無力なのですから…

加速器²⁾を用いて、人体に高電圧変動を発生させ、人を貶めようとする卑劣極まりない行いには、それなりの報いが有る事でしょう。

2007.11.18

²⁾高電圧発生器、超短時間パルスレーザー、マグネトロン、クライストロン等を用いた装置

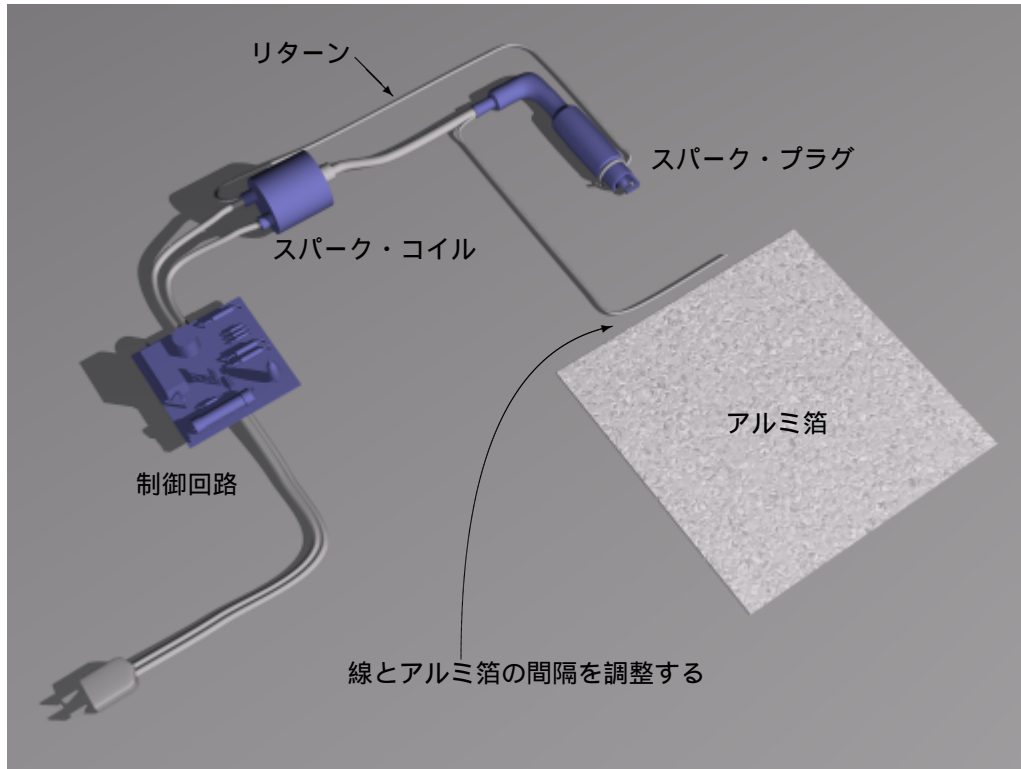


図 2: 高電圧ジェネレーター

観測を続けた結果、回路構成は前日のまま、アンテナとして使用している電線の被覆を、絶縁破壊する形で、コロナ放電が発生しているが、発生しているコロナ放電によるノイズが、被害軽減に非常に有効である事が分かった。

更に、発生しているコロナ放電が、非常に不規則となるような距離間隔を設定する事で、効果は最大となり、声被害は安定して激減する事が分かったが、依然として、人体への直接のコロナ放電が最も効果的だった。

回路は図2のように構成されており、アンテナに使用している電線と、アルミ箔の間隔を調整する事で、声被害、音声被害の軽限度が異なる事が分かった。(アルミ箔とアンテナの間にはコロナ放電が発生している) アルミ箔の代わりに人体を近づける事で、声被害は停止する。この際に、1秒触れて、1秒離す、を繰り返す事が、最も効果が高いと判断できた。これは、恐らく、盗聴電波を受信する、初段のアンプが安定するまで、時間が掛かる為、生じていると思われる。専門用語では、フェージングが発生している状態だと考えられる。

コロナ放電によるノイズで、受信(盗聴)している電磁波のダイナミックレンジが、桁外れに大きくなる為に、初段のアンプに、大きなフィードバック(NF、自動振幅調整)が機能し、安定化するまでの時定数が大きい為、盗聴、音声送信が、非常に困難な状態にあると予測できる。

耳を近づけてコロナ放電を聞くと、発生しているノイズに特徴がある事が分かる。鉄板に、磁石を近づけた時に発生する、バルクハウゼン・ノイズと非常に良く似ている。犯人が混乱している理由は、どうもこのノイズにあるらしい。

これだけ激しいノイズにも関わらず、思考盗聴器が機能し続けている事も分かって来た。つまり、音声送信が停止するだけと言う事。

現在言える事は、スペクトラム拡散方式のパルス・レーダーと、テラヘルツ波³⁾を利用したレーザー盗聴器以外に、激しいノイズに対し、これほど安定して、盗聴が可能なシステムは考えられないと言う事。

2007.11.20

³⁾ 敢えて言えば、レーザーの一種と考えて間違いはない。更に、赤外線と表現する学者もいる。

ギャップを利用したアンテナに関して

高電圧ジェネレーターに、送信アンテナを取り付ける事で、声被害を安定に軽減できる事が分かって来ました。

図3のようにアルミ箔をサンドイッチ状に重ねますが、アルミ箔の間に、厚さにして2~3ミリ⁴⁾程のダンボール等、紙を挟みます。アルミ箔よりも、一回り大きめの厚紙を挟む事で感電事故を防ぐ事が出来ます。更に、アルミ箔が露出しないように、配線用のビニールテープで外周を閉じると出来上がりです。アルミ箔等に、直接、人体が触れると感電してとても危険です。

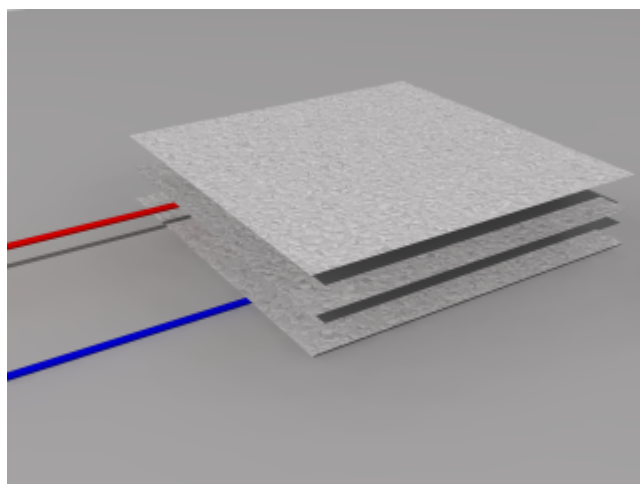


図3: コロナ放電用送信アンテナ

或いは、アルミ箔を、1枚ずつ古雑誌に挟んで、更に、全体を厚手のビニールで包み、配線用のビニールテープで閉じると良

いかも知れません。厚さの調整は、雑誌、ビニール等を使い、サンドイッチ状態にする事で可能になります。原理的にアルミ箔が図3のようになっていればOKです。

この状態であれば、手を触れても問題は無い筈で、手を触れた部分から、高周波の放電音が聞こえますが、高周波は人体の表面⁵⁾を流れる為に、感電する事は無く安全です。しかし、風呂上りなど、全身が濡れている状態や、同時に、他の金属類に触れると危険です。テスラーコイルを用いた実験で、人体にスパークが飛んでいる状態を見た事がありますが、それと同じ状態な分けです。感電は、電圧の強さに依存する訳ではなく、人体を流れる電流に依存します。ですから直流の高電圧よりも、パルス状の高電圧の方が、この用途に相応しいかも知れません。

感電にはくれぐれも注意して下さい。死んでから後悔できませんから。高電圧を実際に扱ってみて思う事は、予測以上に感電事故の確率が高い事です。アメリカでは、テスラーコイルを作成していて、年間300人程の感電死亡事故が起きているそうです。今回作成した装置も非常に危険な装置である事は確かです。

話を戻しますと、これは、構造的に、コンデンサーと等価な回路になっていますが、コンデンサーとは異なり、コロナ放電を発生させる事が目的です。

高電圧ジェネレーターの、アース(マイナス)を一番下の青い線、高電圧側(プラス)を、中央の赤い線に接続してスイッチを入れますと、作成したアンテナから、ジー、ジー、と言う放電音が聞こえます。中間に挟む、厚紙の厚さと、加える電圧を調整する事で、少々不規則な放電音が出るようになりますが、この時に効果は最大になりました。

アンテナから聞こえる放電音は、ジー、ジッ、ジッ、ジー、ジーと言った不規則な状態、スパーク・プラグの放電状態も、同じように不規則で、ジー、パチッ、パチッ、パン、ジーといった状態です。

尚、一番上のアルミは必要ないのかも知れませんが、更に大きなサイズの物を使用して、距離間隔を変える事で、放電状態を変更できる事が分かっています。

布団の下にアンテナを置いて、一晚試してみた所、実に快適に過ごせる事が分かりました。しかし、今の所、観測期間が短い為に、なぜ、声被害が解消するのか詳細は不明です。

コロナ放電による、電磁ノイズが効いている事は確かですが、高周波電界の変動が、被害者(私)の人体に直接、影響しているかも知れません。

不規則(突発的)に、声被害がありますが、これまでのような連続した分けの分からない音声被害は嘘の

⁴⁾厚さを数十ミリまで調整する必要があるかも知れません。

⁵⁾表皮効果、高周波の電流が、導体の表面を流れて、導体の内部に流れなくなる現象。

ように解消します。特に、私自身の考えを、激しく復唱される被害は非常に厄介な被害ですが、この被害はまったく問題とはならない状態です。

考えを、複数の声で復唱される被害は、考えが纏らずに、喋れなくなる感覚がありますが、これらの被害は、自分の声を、0.3 秒程、遅れたタイミングで聞くと、このような、喋れない状態になると言われています。次のような事です。

テレビの民法放送で、次のような実験が放映されていましたが、内容は、実に驚くべき事に、喋れなくなる事に関してなのです。

歌手がヘッドホンをして、マイクを手にして歌いただきます。最初の数秒間は良いのですが、その後には歌えなくなります。司会者も含め、スタジオ中が大笑いです。数名の歌手がチャレンジしますが、同じ事でした。そこで、司会者の堺正章さんが持ち歌でチャレンジしますが、やはり、まったく歌えません。「こりゃだめだ歌えない」の一言にスタジオ中大笑いです。

ヘッドホンからは、歌手の声が 0.3 秒程、遅れて聞こえるように細工されていたのです。人の脳は、絶えず自分の発声を確認しながら話す為に、自分の発する音声が、遅れて聞こえると喋れなくなるのです。

被害者が可聴している音に、敏感に反応する高電圧変動が、被害者の身体に生じている事も、これまでの観測と分析から判明しています。数名以上の被害者から頂いた、IC レコーダーによる録音ファイルからもこの事が言えますし、被害者に共通した現象として、被害者の身体に、奇怪な高電圧変動が生じている事は確かです。

この奇怪な高電圧は、被害者の、聴覚システムの混乱を狙って、照射されているものと考えていますが、計測不可能な程、高電圧な、スパイク状、パルス状の電圧が発生する事もあります。

このパルス状の高電圧は、細胞にとって危険な物と認識しています。

食品加工工場では、細菌（細胞）を殺菌する為に、食品に、高電圧を加える事で加工が行われています。細胞は、高電圧を加える事で、細胞膜が破壊される特徴を持っているのです。人体に高電圧を発生させる事で、少しずつ細胞を破壊すると言う、実に、卑劣極まりない犯罪が行われているのです。

話を戻しますと、音声被害の軽減方法が分かって来た分けですが、しかし、あまり喜んでいられない事も確かで、声被害が解消すると、今度は、身体攻撃と仄めかしが激しくなります。声被害軽減と同時に、仄めかしが多発する事は、確かに、犯人が複数（多数）存在する事を意味していると思います。

突然、数秒間、意識が朦朧とする激しい攻撃も受けましたし、一晩中、体の痒みで目が覚めてしまうような事も多発しました。

痒みと痛みは、同じ神経細胞が感じ取っていると聞いた事があります。

痛みを感じた神経細胞から、神経を伝播する電気信号が、脳に伝播して、更に、脳が信号を処理する事によって感覚が生じる筈ですから、神経を伝播する、信号の時間間隔や、長さ（パルス長）が異なる為に、痛み、痒みを区別できるのだと思います。

そうしますと、全身にテラヘルツ波（赤外線）を、パルス状に照射されている可能性が高いと予測できます。

非常に短時間、高出力なパルス変調レーザーを使う事で、麻酔を使う事無く、簡単な手術が可能だと言われています。神経の反応時間よりも、短時間の強力な電磁パルスは、人体に痛みを与える事は殆ど無いと言います。

知り合いの歯医者さんに、試しに、治療用のレーザー・メスを、手の平に照射して貰った事がありますが、確かに痛みは感じませんでした。レーザー・メスを絶えず大きく動かしている為に、手は切れませんが、動きを止めれば切れるそうです。メスですから当然です。しかし、ちり紙に照射すると、紙は簡単に切れました。短時間のパルス変調されたレーザーは、麻酔無しで手術が可能なのです。

パルス時間やパルス間隔を調整する事で、痛みや、痒みを感じさせる事ができる筈ですし、短時間、強力なレーザー光線を、パルス状に、物体に照射すると、カン、パン、トン、と言うようなレーザー・アブレーション⁶⁾が発生するのです。

⁶⁾非常に短時間、強力なレーザー・パルスを照射した物体からは、音波、超音波、電磁波、X 線が発生する。特に激しい音波、超音

普通の意味でのレーザー光線は、コンクリートや木を透過する事はありませんが、もう少し波長の長いテラヘルツ波は透過します。そして、光と同じように、鏡で屈折する事のできる電磁波なのです。性質としては、ラジオなどで使われている、波長の長い電磁波と、波長の短い光の性質を同時に兼備えています。光に良く似た性質が赤外線と言われる所以ですし、コヒーレントな性質を持つテラヘルツ波も開発されていますから、性質としてはレーザーと同等な分けです。

2007.11.21

波が発生する事をレーザー・アブレーションと言う。また、この時、表面の数原子層が一瞬にしてプラズマ化し、強い圧力が発生する。当然の事、強電界、強磁界状態であり、高電圧が発生する。

前日に続き、放電アンテナのサイズ、形状を調整していますが、被害者（私）の体に高電圧を近づける事なく、被害を軽減できる事が分かって来ました。アンテナの形状、コロナ放電の状態が適切に設定される等、条件が満たされる事で、数メートル以内で有効だと言う事です。

被害者の人体に、直接放電を行わない状態でも、かなり音声被害は軽減できますので、併用してラジオ、ステレオ等を可聴する事で、被害を殆ど感じずに済む状態です。

一つ仮説が成り立つのですが、何も防衛しない状態で、被害者の体に高電圧が発生している事が、これまでの研究調査から判明しています。この奇怪な電圧と、今回、防衛の為に作成した装置による高電圧が、干渉を起こす事が考えられるのです。

犯人が発生させている高電圧と、防衛の為に発生させている高電圧が加算された状態ですから、思うように危害を加える事ができない状態と予測できます。盗聴目的で、センシング用に発生させている電圧が変調されて、今までのようには盗聴できない状態ですが、更に、ノイズが加わっている状態と考えられるのです。

音声被害の軽減と同時に、騒音のような激しいノイズが聞こえていた状態からも開放された事は事実です。突発的に声被害がある状態ですが、激しいノイズが聞こえている状態から開放されて分かる事は、かなりクリアな音質で犯人の声が聞こえる事でしょうか。以前に執筆したもの（ページ15）に、声以外に壊れたラッパのような音が聞こえると書きましたが、若い女性の悲鳴に近いような叫び声だと分かって来ました。（笑）

それにしても意味不明な内容に唾然とします。聞き取れる内容を、少し列挙してみたいと思います。

- 皆知っている
- 皆知っているのに
- もう終わりだ。もう～お終いだ。この男はもう終わりだ。もうお終いだ！
- 口を慎め
- 裏切り者。この裏切り者。
- こいつは直らない
- 話にならない
- 聞いていない、効いていない、のどちらか不明。
- 人間じゃない
- 苦しみ！、苦しみな！
- この男は分かんないよ
- 可愛そうに、可愛そうだね。可愛そうだよ。可愛そうな事するね。誰の事なのか不明。
- 勘弁して、もう勘弁しね！
- 自殺する。自殺しろ
- 馬鹿過ぎだよ、馬鹿みたい
- このおじさんはね
- ひどいひどい
- 分からないと思っているのか！
- 何にも知らないくせに
- いい加減にしろ！
- 大人になりなさいよ
- 女の子みたい
- 気遣いだ。ありや気遣いだ。おかしいんだ！
- 馬鹿言ってるじゃねーよ
- 泣いちゃった。誰が泣いたと言っているのか不明。
- もうほっときな、もうほっとけ、「仏様？」、あのやるおかしんだ。
- もう終わっているのに。もう終わってるよ！
- 身の程知らず！
- おまえには分かんないよ！ こいつには分からない。
- 赤ん坊みたい
- 狂ってる
- おかしい。おかし過ぎる。頭がおかしい。
- まだ、分かんない。まだ、分かんないのか？。分かれよ！。分かりそうなもんだ。
- 喋るな、まだ、喋っている。まだ、終わんないの？。まだ、やってる。
- 馬鹿すぎだ
- 馬鹿にし過ぎだよ！ 馬鹿にし過ぎだよ！
- 大人になれ、大人になれよ！
- みっともね～。私の事なのか、彼らの行いの事が不明。
- 殺されるんだよ！、殺される！、殺されちゃう。
- 親と思ってる。もう、親と思ってる。ない。
- またやってんの？ 眠れないよ！うるさいな！
- 畜生だ！ 犬だ！
- 犬だ！、犬だ！。スパイだと言っているように感じるが畜生の意味なのか不明。
- あれだけ言ったのに、どうしようもない。
- いいきみだ！
- 自分でやってるのに
- おめでたいやつ！ おめでたい！
- 突発的な意味不明の叫び声。内容は聞き取れない事が多い。
- 酷い雑音
- 明らかに、内輪揉めしている声が聞こえる。

絶えず、複数（数名以上の声）の声で、代わる々語りかけてくるような感じだが、列挙した順番に関係なく列挙された内容が繰り返されている状態で、聞いていると飽きてくる特徴がある。二年以上に渡り、列挙したものの以外に聞き取れる音声は、まれにしか無い。口調は少しずつ異なるが、はっきりとした口調で鮮明な音質感を感じる。まるでどこかの宗教の御経のようだ。レコーダーに録音済みの音声を再生したとしても区別がつかない内容で、一人か二人の犯人が、録音済みの音声を再生する事でも可能な内容だと感じる。

音量が大きい時と小さい時があるが、再現性としては、私が作業を開始した直後に必ず音量が大きくなる事と、突然の声に、反射的に意味を考えてしまうと、この時とばかりに声被害が連続する事。

考えを復唱される被害が一番痛に障る。とても鬱陶しい。しかし、今回作成した装置により劇的に軽減された事と、不思議なぐらい精神の安定が得られた事で救われたと感じている。しかし、残念な事だが、お奨めできる装置ではない事は確かである。感電の仕方次第では命の保証は無い。安全に使えるように、しっかりとした設計と、部品の選択が必要だと思う。今回は無理を承知で、技術者用に、これまでの経過を書き綴った事を理解して頂きたい。

2007.11.22

放電キャップとアンテナに関して これまでの研究で最大の成果が得られたので追記したい。

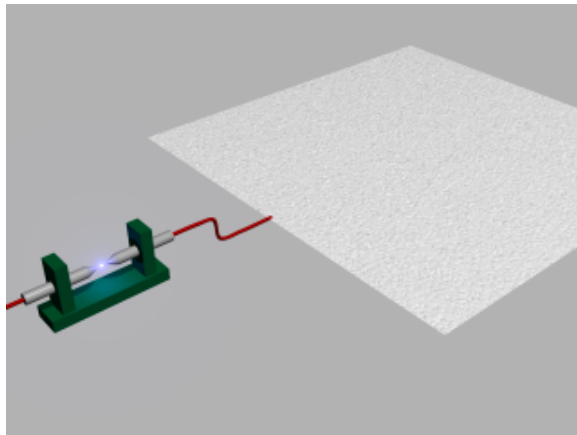


図 4: 放電ギャップとアンテナ

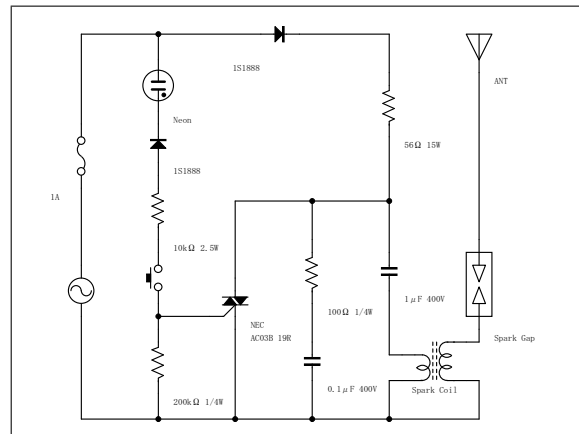


図 5: 回路

図 4 のように、巨大なアンテナ（床一面に敷いたアルミ箔）に、放電を行う事によって、比較的安定に、声被害を軽減できる事が分かって来た。回路としては、図 5 のようになっている。

高電圧発生回路、スパーク・コイルの高電圧出力を、スパーク・ギャップを通してアンテナに接続する。この際に、リターンを取る必要はない。リターンを接続してしまうと、効果が減少する事が分かった。

アースから離れた状態（リターンを取る事なく）で、巨大な放電アンテナに、高電圧をチャージする形になっているが、正確な等価回路は不明。しかし、アンテナとコンクリート製の室内との間で、巨大なコンデンサーを形成している事は確かだ。一見すると、作動しない回路に観ぜられるが、確かに作動するし、ギャップに放電（スパーク）が確認できる。高電圧を扱う時に有りがちな話と思う。

発生しているノイズは、それ程大きくはない。数メートル離れた場所でラジオ、テレビ受像機にノイズは殆ど確認できない。直近ではテレビ受像機に大きなノイズを確認できる。水平、垂直共に誤動作が発生している状態。

スパーク・ギャップで、発生している放電の状態が、不規則な程、効果が高い事が分かった。スパーク・ギャップの間隔を調整する必要がある。

これまでの研究で、効果は最大となっている。犯人の声はとても小さく、しかも、断片化していて、注意して聞かないと聞き取れない。

副次的に得られた結果として、コンピューター、オーディオ、リモコンの誤動作がある。スパーク・ギャップの間隔を極端に狭くした時、放電時間が長くなり、振動的なスパークを確認できる。この時に、家電が激しく誤動作を起こすようになる。犯人が行っていると言われていた機器類の誤動作が再現された。高電圧の振動を伴う、電磁スペクトル次第で、機器類は遠隔操作が可能だと証明できた事になる。

声被害は突発的にある状態だが、犯人の声が断片化⁷⁾しているのが分かる。私の考えを、複数の犯人（時間差を伴って）で復唱される被害は、殆どない状態となったが、私の考えによる、私の心の声を、変調した音を聞き取れる。

思考すると同時に、思考にピッタリと追従する形で、復唱されているように感じるが、人間がしているとは思えない。つまり、スピード的に言って、予め打ち合わせて練習でもしない限り、他人が話すスピードで、物まねをする事はできない筈だ。

思考による声⁸⁾を変調した音ははっきりと聞こえる。まったく同じ変調音を使って、犯人が話している。

⁷⁾途中で声途切れる。

⁸⁾発声しない状態の思考による声、考え。自分だけ（私）に分かる筈の。

私の考え⁸⁾と、犯人の声が、非常に区別し難い状態から開放されたのが分かる。かなり性質の悪い、悪質なやり方(犯罪)だ。

この被害に遭い始めの頃、大変混乱したが、現在その理由が明確になりつつある。被害による声が自分の考えなのか、他人なのか分からない状態では、人は例外なく混沌と混乱の中を、さ迷う事になる。しかし、被害が長くなると、その識別が付くようになる為に、精神の安定が回復する事になる。防衛装置により、この事ははっきりと認識できる状態となった。

この装置は、思考盗聴器と言うより、脳内振動の盗聴器と言う方が正しいと思う。テンペスト⁹⁾の人間対応版と言う事だが、所詮、盗み聞きに過ぎず、盗人のする事には違いない。思考は無形物だが、無形物だからただ(無料)とはならない。この世でもっとも高価な物を盗んでいるのだ。しかも、盗んでおいて内容に文句を付けるとは、盗人猛々しいにもほどがある。犯人は、筋金入りの性格異常者だと言える。

加害装置による音声送信の、音の大きさを下げる事に成功した分けだが、加害装置は、一定以上の音量で、出力を上げられない原理を持っていると感じる。聴覚器官は、有毛細胞により、音波を電気パルスに変換して、脳細胞に信号を伝播している。有毛細胞は、電磁波により発生する、高電圧の電界振動にも敏感に反応する原理を持つ。とすると、電界の振動による場合と、音波による場合とは、結果的に、有毛細胞が発生するパルス信号に、違いが有るのではないかと予測できる。

私が、防衛の為に使用している、高電圧が重畳して、振幅制限と変調が発生して、犯人による音声送信がロックされている状態と予測できる。

犯人の音声送信による音が、かなり小さく感じられる為に、聞き取り難さから、音声が断片化して聞こえるとも仮定できるが、犯人の話し方が、明らかに異なって来た事も確かで、ノイズの為に、盗聴が行い難い可能性もある。

この研究を進める事により、安全に使える防衛装置を作成可能だと考えている。原理を明確にする事により、特許も成立する可能性がある。

現在、音声被害に関しては、防衛装置により激減しており、快適な生活が戻りつつある。そして、不思議な事に、不自然にも観ぜられる程の、精神の安定が得られた。

しかし、この精神の安定は、作り物だと感じている。このような防衛装置に守られながら生活する世界では、どうしようもないと思う。地獄絵図という言葉が頭に浮かぶが、恐らく、行動から察するに、犯人たちの世界も地獄絵図その物なのだと思う。

2007.11.27

⁹⁾ コンピューターのディスプレイや、キーボード入力を遠隔地から盗み見する技術。

ギャップの工夫に関して

昼間と違い、就寝直前など、静かな環境では声被害が目立つものですが、このような状況でも、ギャップの構造次第で、声被害を、抑えられる事が分かって来ました。

使用する材料は次の物です。

- 絶縁材料。例えば、プラスチック製で厚手の下敷など。3ミリ厚程度のアクリル板が使いやすいです。
- アルミ箔。
- 両面テープ。
- 絶縁用ビニール・テープ。

作り方は簡単です。

1. アクリル板に両面テープを張ります。
2. 両面テープよりも少し大きめにアルミ箔をカットし、両面テープが隠れるように上に張ります。
3. 余分なアルミ箔を、定規を当ててカッターで切り取り整形します。
4. 次にアルミ箔に、カッターを使用して、筋状に傷を入れます。この傷が無数の放電ギャップを作り出します。
5. 配線を施し放電の状態を確認します。
6. この状態では、放電音がかなり大きいので、上に絶縁用ビニール・テープを張ります。この際に、あまり強く押し付けないようにします。強く押し付けると放電ギャップの状態が変化してしまいます。

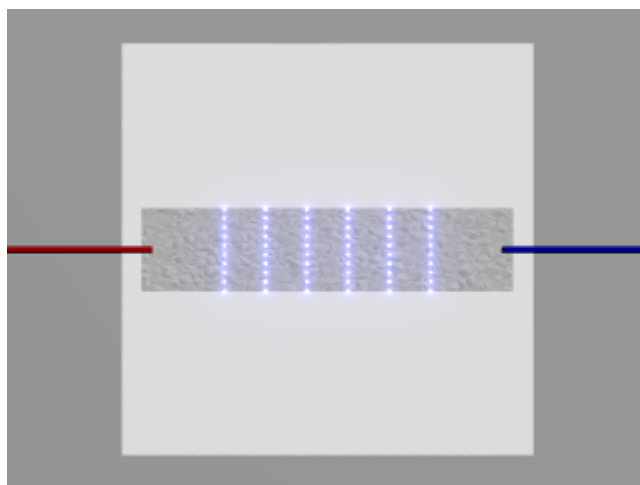


図 6: 概念図

作成した放電ギャップに配線を施し、電圧を加えると、図 6 のように、カッターで付けた傷に沿って、ランダムに放電が発生します。クリスマス・ツリーのように、放電する位置が変動すれば成功です。

このようにならない場合、電源を止めてから、カッターで付けた傷を、柔らかい物でなぞり、溝を整形します。それでも上手くいかない場合は、カッターで傷を付け直します。

溝の状態が重要で、手先の器用さが物を言うデリケートな調整が必要です。上手く作成できれば、放電音は小さく抑えられますし、上に絶縁テープを張る必要はありません。溝（カッターで付けた傷）が、できるだけ小さい方が効果が高いように思われますが、どういう理由によるのか不明です。

構造的に言って、放電電極が無数にあるのと同じ状態で、更に、放電の位置がランダムに変動して、複雑な電磁パルスが発生する事ができます。少し大きめのアクリル板を使用し、複数加工¹⁰⁾して、配線を切り替えますと、微妙な効果の違いが分かります。効果によっては、アルミ箔を張り直して、作り直す事が可能ですので、カット・アンド・トライで試す事も必要かも知れません。

微妙な調整が必要な事を考慮しますと、犯人が使用している周波数帯域¹¹⁾に同調するような電磁波が発生するには、溝の状態に条件があると思われれます。溝が狭いほど効果が高く、そして、放電電圧の状態が、振動的であり、時間的に言って長い事が分かっています。

ギャップの形状に関しては、複数のバリエーションが考えられます。可能な限り大き目のアルミ箔を使用して、中央を裁断する事で、巨大なアンテナ¹²⁾を作成する事も可能です。サイズにより効果が異なる事も分

¹⁰⁾ 図 6 の場合、縦方向（上下）に並べる事になりますが、間隔は二センチ位、大きめにした方がトラブルを防げます。小さいと、隣にスパークが飛んでしまい上手く行きません。

¹¹⁾ 正確に言うと、犯人が発生している電磁波による効果を乱せるような防衛用電磁波です。

¹²⁾ 溝は 2 本以上設ける事がコツとなりますが、あまり多すぎても駄目なようです。取り敢えず数本が良いと思います。必要なら増やす事は簡単です。

かってきました。テラヘルツ波を発生する時に使用される光スイッチと、構造が似ているような気がします。

何故、このような加工を行ったのか説明しますと、これまでに作成した防衛装置を利用していますと、しばらくすると効果が落ちてくる事に気づいたのです。

装置の位置を、少しずつずらす事で、再び、声被害が軽減されるのです。これを繰り返している内に、放電電極を、自動で可動可能なように工夫すれば良い事に気づきました。モーターを使って可動する事も出来るかも知れませんが、細工が大変ですし、装置の寿命も問題となります。そこで、今回のアイデアに行き着いた訳です。発生する電界の分布が、ランダムにベクトル化される事になります。

デリケートな問題ですが、犯人の声が、シュレッターに掛けたように断片化する事を確認できます。不思議な現象です。

犯人が使用している装置は、位相制御のような、精密な変調信号を使用しているのではないかと感じます。防衛装置の位置が、相対的に固定されている場合、防衛能力が下がる事が確認できますし、放電電極が、ランダムに移動する事により、確実に効果が上がります。

もう一つの仮定として、可動する物に反応する可能性もありそうです。例えば、ドップラー効果を使用した装置であれば、高速に、位置が変動する電磁パルス源は、混乱を引き起こすと予測できますし、加害装置は、音波に対して、位相レベルで、正確に反応する事が分かっています¹³⁾。防衛の為に発生させている放電は、"バリバリ"とした音を伴います。低周波から超音波領域にまで及ぶ音ですが、この音波が相乗効果を上げている可能性もあります。いずれにしても、現時点では、正確な原理が不明な事が残念です。観測を続ける事で新たな情報も得られると考えています。

デジタル・ニューロフォンを見た事はないのですが、被害者の会、ホームページにある翻訳を見ますと、犯人が使用している装置は、デジタル・ニューロフォンの記述その物に思えます。

作成した放電ギャップから発生している電磁ノイズはかなり大きめです。針式の目覚し時計を数十センチに近づけますと、作動が停止しますし、リモコンや、使用中のコンピューターが頻繁に誤動作します。人体の脳や、聴覚の有毛細胞にも影響があるレベルと考えられます。以前に実験した、コヒーラー検電器が激しく反応するレベルの電磁ノイズが発生していますし、電磁ノイズの大きさは、明らかに、放電ギャップの数に比例します。また、放電ギャップの状態に影響される事は確かです。しかし、大掛かりなテスラーコイルに比べれば玩具のような装置だと思えますし、発生している電磁ノイズも、それ程気にする必要も無さそうです。

電磁ノイズの大きさから考えて、犯人が音声送信に使用している電磁パルスと同程度か、少し大きめだと予測していますが、声被害が軽減される事を考えますと、犯人が使用しているシステムは、デリケートな信号処理を必要としていると考えられます。その信号を壊す事は、意外に簡単にできる分けです。

人体に、コロナ放電を行う事なく、安全、安定に、声被害を軽減できる装置を開発する事に成功した分けですが、現在の所、完璧に声被害がなくなる分けではありません。思考を邪魔されずに済むレベルだとは言えます。しかし、以前のような感電の危険性もなくなり、量産の可能性も出てきましたし、バッテリー駆動により、携帯できる装置の可能性もあります。ですが、現時点の問題として、すべての被害者に効果が有るものかどうか検証する必要が生じています。

他の問題としては、この装置の開発中、集団ストーカー被害、仄めかし被害、身体に対する攻撃が過激さを極めた事を考慮すると、防衛装置の使用により、一時的に被害が重くなる可能性も否定できません。

装置の開発を進める事により、重要な可能性として、加害装置の原理を推定する事のできる、情報が得られる可能性がある事でしょうか。

加害装置の原理が判明すれば、防衛装置を作るにしても、無駄なく正確にできる筈です。軍事機密に属するような技術が使われていると仮定しますと、身に危険が及ぶかも知れませんが…

2007.12.03

¹³⁾被害者の録音した声紋の分析から、被害者の人体に、声(音波振動)に追従する電圧変動が確認できます。この電圧変動は、犯人が照射している高周波の電磁パルスにより発生していると考えられるのです。

防衛能力のアップに関して

防衛用に使用している高電圧は、電源周波数 50Hz に同期した高電圧をパルス状に発生している。この為か、防衛能力に限界が見え始めて来た気がする。少なくとも、最初の頃に比べると、その能力が落ちて来たように感じるのだが、それとも、性能は変わらないが、人の感覚によるものなのか、いずれにしても防衛能力に限界を感じている。防衛能力のアップの為、試行錯誤した結果を記述したい。

最初に、パルスの発生間隔をランダムに変更した所、見違えるように性能がアップした事を、書き加えておきたいと思う。

パルス間隔がランダムになった事で、防衛能力に大きな影響が発生するのは、同期平均などのフィルターを使用しているか、若しくは、ロックインアンプの周期、タイミングを変更するなどの調整により、

しかし、今回は、パルス間隔を電源に同期したままの状態、可能な限り防衛性能をアップする方法を模索したいと考えている。

手始めに、図 7 の概念図のように、細い銅線を用いて細工を行ってみた。

広面積のアルミ箔に対して、針状の電極を接近する事で、安定したコロナ放電が発生するようになる。しかし、今回用いている銅線は、0.11mm と細い為に、クーロン力による激しい振動（機械的な）が発生する。細い銅線の先端は、ブルブルと振るえるように騒がしく、そして、激しく振動している。これに伴って、犯人が動揺しているのだから、思わず笑ってしまう。

この状態で、アルミ箔と、針状電極の距離を適切に調整する事で、防衛能力に格段の差が発生する事が分かって来た。面白い事に、音声送信だけでなく、盗聴にも影響が発生しているらしい。彼らの会話から推定できる事として、激しい動揺の結果が聞き取れる。不思議な事である。

これまでの研究でも、パルスの発生間隔が不安定な時と、コロナ放電の状態が不安定な時に限って、防衛能力が増している事が分かっている。

詳しく回路を説明すると、図 7 の概念図の左側には、描かれてはいないのだが、実際には、巨大なアルミ箔が接続されている状態で、右側の小さなア

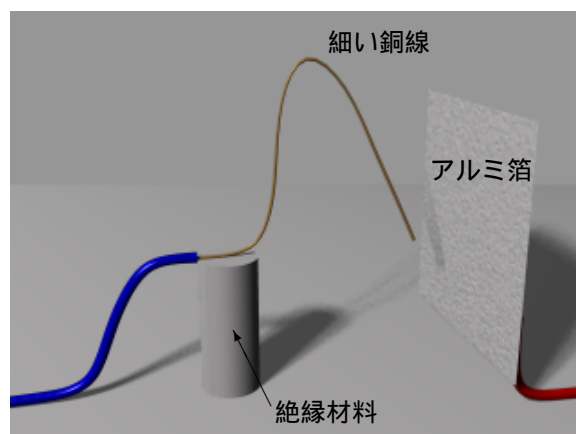


図 7: 針状電極

盗聴器のチューニングを行ったからとも予測できる。

アルミ箔は、約 30cm 四方のサイズで、高電圧源のプラス電極に接続されている。概念図の中央に配置されている銅線の太さは、約 0.11mm で、概念図からの印象よりもかなり細い。概念図は、かなりデフォルメして描かれている事に注意されたい。

左側に接続されている巨大なアルミ箔は、犯人の送信する電磁パルスに対して、アンテナとしての役割があると考えられ、高周波の高電圧が発生している。

この電圧を、アンテナ電圧と表現する事にすると、アンテナ電圧と、防衛の為の高電圧源による電圧は、ミキシングされている状態と考えられる。

更に、高電圧に対する絶縁は、大気によって成されており、特性としては、高電圧である為に、非線形の伝播特性を有していると考えられる。

つまり、電圧の変動に対して、流れる電流は指数関数的に増加する特性を持っている。

この状態は、ミキサーと、非線形増幅回路の直列回路と等価であり、無線機などで使用されている周波数変調回路と、同じ等価特性を持つと考えられる。

この為に、犯人の送信している電磁パルスに対して、ある程度、同期した高電圧、高周波の、変調ノイズが発生していると予測している。

この予測が正しければ、スペクトラム拡散などの、パルスレーダーに対しても、ある程度の防衛能力を期待できると考えている。

2008.1.13

1.1 被害による感情の操作に関して

ひとつ重要な事に気づきました。

激しい音声被害を軽減する為に、ランダムに変化するスイープ音を再生する事で、音声被害が軽減される事が分かりました。

音声被害と共に感じている振動は体に残りますが、この事から、声被害と共に体に感じている振動が、声と連動している事がはっきりと分かります。

更に、ヘッドフォンを用いて、大音量でスイープ音を再生した後、ヘッドフォンを取ると、不思議な事に、声被害は殆ど感じられません。しかし、しばらくすると、徐々に被害を感じ始めます。これは、大音量のスイープ音に耳が慣れた為に、一時的に難聴になり、音が聞こえにくくなる為発生する現象です。つまり、難聴者に、声被害者はいない、と言う仮説が証明された事になります。

デジタル・ニューロフォンのように作用しながら、しかし、耳が聞こえないと声被害は無いのですから、皮膚から信号が伝播する分けではない事は確かです。恐らく、PWM 変調された電磁パルスにより、聴覚の有毛細胞が刺激されて、被害が発生しているのです。有毛細胞は電圧変化にとっても敏感な事も、この事を裏付けています。

一時的な難聴状態の時に、判明したもう一つの発見は、声被害の声がとても小さく感じられる事と、声とは明らかに異なる激しい音？が発生している事です。その音は、壊れたラッパのようにも感じられました。そして、声被害の音よりもかなり大きな激しい短時間の音です。

高電圧発生器を使って、電圧の加え方を工夫していた分けですが、不思議な感覚が存在する事にも気づきました。

高電圧を発生した瞬間から、それまでイライラ、ソワソワした気持ちが嘘のように治まり、とても安心した気持ちになる事です。犯罪に使用されている見えないテクノロジーは、感情をコントロールする事ができるのだと思います。

完璧なコントロールと言うよりも、脳波を乱すような、電磁パルスが使われていると言う事です。恐らく、脳波を乱すタイミングが重要なのでしょう。防衛の為に使用している、電磁ノイズが合成した状態の波形では、犯人が意図したような効果が得られない為に、このような現象が生じているのだと思います。

高電圧発生器のスイッチを切った途端に、自分でも信じられない位に、イライラして感情を抑える事が難しくなります。

気持ちの問題などといった生易しいものではなく、激しい感情の変化を感じ取れます。

更に、視力が変化します。高電圧を発生させて10~15分ぐらいで、視力がアップしている事がはっきりと分かり、同時に感情が安定して、表現が難しい程、とても穏やかな気持ちになります。

イライラ状態と、表現の難しい程の穏やかな気持ちと、クリアーな意識状態が、機械のスイッチ一つで切り替わるのですから不可思議な事です。言葉では言い表す事が難しいですが、“大発見した”とだけ付け加えたいと思います。

恐らく、犯人が照射する電磁パルスにより、脳波が乱されている状態から、防衛の為に私が発生しているコロナ放電が、脳内に多くのパルス・ノイズを発生して、ニューロンの発火を誘発し、ニューロンの活動電位の平均値が上昇、変動し、結果としてマスキング効果が生じ、脳が正常な作動状態に戻るため、このような感情の変化を感じ取れるのだと思います。

何しろ脳の活動電位は0.1V程度です。不思議な事に、脳は、混乱が起こる程のノイズが発生すると、逆にバランスを見出して安定する機能が存在すると言われていました。

追記

「皮膚から信号が伝播する分けではない事は確かです。」と書いてしまいましたが、耳からの、大音量の音を聞く事によって、一時的に難聴になる事と同じように、皮膚からの刺激によっても、同様の効果が有ると、区別が付けられない事になります。したがって、現時点では、飽く迄も、一時的な難聴状態で、音に関して判明した記載部分に限って、言える事と修正したいと思います。

1.2 脳波（思考）盗聴、音声送信被害に関する考察

脳の機能、仕組みを調べますと、以下に列挙した内容になります。

- 神経からの電気的なパルス信号が脳に伝播する事で感覚が生じる。
- 脳のシナプスがパルスを発生する事で思考が生じている。
- シナプスの発火による電気パルスは、0.1V 程度であり、振幅は変化しない。
- シナプスが伝播する信号は、周波数と、位相により区別され、振幅の変化に依存しない。
- 思考は、言葉（音声信号）に還元される。
- 思考と聴覚には、フィードバックが成立している。
- 思考による言葉（発声する、しないに関わらず）と、聴覚器官からの信号は同じ神経回路に伝播し認識される。
- 脳内に発生した電気信号と相関の高い音波振動（マイクロ・バイブレーション）が人体頭部に生じている。
- 耳は音を聞くだけでなく、センシングの為に音を発生する。（誘発耳音響放射）
- 耳から入った音は、有毛細胞により、電気的なパルス列に変換され、脳に伝わる。この際に、脳波には反応が出る。（聴覚誘発電位）
- 脳内には思考による脳内言語が存在する。

耳は音を聞くために有る事は分かりますが、しかし、耳から音が出ると言うのは驚愕の事実¹⁴⁾です。耳から、思考した内容の音声絶えず出ていると言う事では無いようですが、しかし、人体には不思議な機能が備わっている事は事実です。脳の内部で、思考が、音声振動と相関の高い形で存在しているかも知れません。

これらの事実を考慮して、遠隔地から思考を盗聴可能な原理が存在するとすれば、適用可能な技術は限られていると予測できます。有力な方法論として、マイクロ・バイブレーションの盗聴が上げられます。パルス・レーダー、テラヘルツ・レーザー、変調方式としては、スペクトラム拡散方式を用いる事により、脳内振動の盗聴は可能になると考えられるのです。原理的には、マイクロ・バイブレーションを、ドップラー効果を利用して検出する事になるでしょう。

他の方法として、SQUID のような、高感度な磁気センサーを、複数用いて、相関処理を行う事でも、ある程度の事はできるかも知れません。

誘電体に対して、高電圧を加える事と同時に、インパルスを加える事で、電界スキニングと言う技法も存在します。ですが、現在の所、有機体に対して適用された話は聞きませんが、人体頭部には脳波が有る分けですから、この技法も適用可能かも知れません。何しろ、細胞は水晶のような非線形の伝播特性を有しているのですから、周波数変換すら可能だと予測できるのです。

人体の、電磁波に対する、非線形の伝播特性を利用する事を前提に、人体に PWM 変調した電磁パルスを照射して、脳波と干渉¹⁵⁾させ、変換された電磁波を検出すれば、遠隔地から脳波を盗聴できると考えられますが、しかし、強烈な電磁パルスを脳に照射したりすれば、脳が機能しなくなる事が考えられますし、脳内、ニューロンの発火による電気的なパルスを、信号の合成と言う形で、遠隔地から盗聴する事は少々無理があるとも思えます。しかし、実際に試していないので、全面的に否定する事もできません。照射する電磁波と、その結果である変調波の出力次第、と言う事になるかと思われれます。

¹⁴⁾この発見者に対して、ノーベル賞の授与が噂されています。現在、病院、研究機関等で、聴力の検査の為に、この原理が応用されています。

¹⁵⁾人体の非線形伝播特性を考慮して、脳波を α として、ミキシングする信号を β とすれば、 $\cos \alpha \cos \beta = \frac{1}{2} \{ \cos(\alpha + \beta) + \cos(\alpha - \beta) \}$ の信号が検出される筈です。ミキシングする信号に高周波を利用する事で、脳波を高周波帯域の電磁波に変換できる原理です。人体の電圧変動に対する伝播特性は、水晶と類似しています。

耳からは、センシングの為に、音が発生する事があるようですが、これは、可聴音が小さい時に、積極的に耳から音を出し、結果、発生したピートを確認し、センシングする為の耳の正常な機能だそうです。つまり、音が小さいと、その音を探し出す為に、耳からは同じ音が出る¹⁶⁾のです。

故意に、小さい音を聞かせる事で、耳からはその音が出ると共に、脳内には、この音による干渉が発生しています。聴覚誘発電位の原理からも当然の事ですが、もしも、被害者の思考波と干渉が生じた場合、思考波の一部が符号化されて耳から出る事になります。この事が干渉の本質だと言えます。侵略的な技法を駆使用する事で、被害者の思考した内容（脳内言語）が、符号化した音波振動という形で耳から漏れるのです。この音をドップラー・レーダーで、遠隔地から盗聴する事はできる筈です。しかし、被害者に対して、故意に小さい音を、安定に聞かせる必要がありますし、聞かせている音¹⁷⁾を予め知らない限り分析（復号化）はできない事になり、犯人にしか分からないように盗聴が可能な訳です。

音声送信の可能性としては、聴覚器官の有毛細胞を刺激する事が最も効率的だと判断できますが、しかし、思考が言葉（脳内言語）に還元される事を考慮すると、脳に直接、音声信号¹⁸⁾を伝播できる可能性も否定できません。この場合、電磁パルスを使用して、更に、精密な位相変調（パルス列の間隔調整）が要求されると判断できます。

脳内に発生している信号列から、脳が音声認識に必要なとする信号列を検出（抽出）可能であり、更に、人体にパルス状の高電圧を発生する事が可能であれば、意外にも、簡単に音声信号¹⁸⁾を遠隔地から送れる事になるのです。

被害者の発声や、可聴音（音波振動）に連動した高電圧変動が、被害者の人体に発生¹⁹⁾している事を考慮すると、このような技術を用いた犯罪行為が行われていると考えても、不思議な事とは思われません。少なくとも、電磁ノイズの減少する場所では、音声送信被害は、軽減、或いは消滅する事が分かっていますし、今回考案中の防衛装置が有効な事も、これらの技術の存在を裏付けていると思います。

これまでの調査で判明した事実（証明済み）としては、次の通りです。

- 被害者の可聴している音や、発声に連動した高電圧変動を、被害者の体に発生させている。人体に発生している高電圧変動は、位相レベルで、ピッタリと音波振動に追従している。
- 電磁パルスの減少する場所では、声被害は軽減、又は、消滅する。
- 被害者の体に、強烈なパルス状の電圧変動が観測される。電圧レベルは概算で、数十万ボルト以上。

他の被害者と話をしている、気が付いた事は次のような内容です。

- 被害者が可聴している音に対して、可聴音を変調した音を送信し、聞かせる。
- 被害者が思考している音（心の声）に対して、思考による音（心の声）を変調した音を、リアルタイムに送信し、聞かせる。
- 被害者の思考している内容を、復唱した音声を聞かせる。時間差が伴う事もある。
- 犯人の声を变調して、音声送信している。
- 被害者の知り合い、家族に似せた変調音で、犯人が語り掛けてくる。
- 音声に、低周波の響きのような強烈な振動感が伴う。
- これまでに聞いた事のないような酷い雑音が混じっている。
- レーザー・アブレーションのような、ラップ音が頻発する。

¹⁶⁾この音の、追従の正確さ、等に関しては、情報が少なく明確ではありません。

¹⁷⁾犯人が被害者の人体に発生させている電圧変動による、聴覚有毛細胞の刺激等で、脳内に発生するパルス列。

¹⁸⁾正確には、音声と言う感覚を与え得る脳内のパルス信号列。

¹⁹⁾加害によると考えられる現象で、被害者の録音した、声紋のスペクトラム分析により明らかになった。

これまでに調査した内容と、分析結果、防衛装置の有効性をトータルに考慮すると、被害者が訴えている内容は、科学的に、正確に証明が可能だと考えられるのです。

それから、一つ気づいた事として、自作した高電圧源に身を近づけた時、“もやもや”するような独特な感触がある事に気づきました。被害を受けている時に、頭や、性器に感じる“もやもや”“ジリジリ”した感触と、少し似ている気がします。下敷を、セーター等に擦り付けて、静電気を発生し、皮膚に近づけても同様の感触があります。

これ等の被害は、マイクロ波、ミリ波、テラヘルツ・レーザー等²⁰⁾を用いた、電磁気的な皮膚への刺激によっても可能だと思います。刺激のバリエーションは、恐らく、パルス変調の時間幅、時間間隔に依存する事でしょう。パルス・レーザーを用いる事で、痛みを感じずに手術が可能に分けですから、出来ない筈はありません。

それから、当然の事ですが、一時的に音声送信を止める事が可能になったとしても、脳波(思考?)盗聴をブロックしない限り、被害を、本質的には、食い止める事はできないと言う事です。音声送信を軽減する事は、確かに可能なのですが、しかし、しばらくすると、音量が増加するのを感じます。体感的なもので、計測できないのが残念ですが、装置を改良する度に効果が変化するのは本質ではないと思いますし、やはり、思考盗聴技術の存在が、犯人達の、アキレス腱になっている事は確かだと思います。

装置の位置を動かす事で、一時的に大きな効果を得る事ができますが、これは、再現性のある現象です。発生している電磁ノイズの大きさにも拠る事は確かですが、電界の分布に大きく影響される事は特質すべき現象だと感じます。犯人が使用している装置は、指向性が強いのかも知れませんが、位相の変化に敏感なのかもしれません。

2007.12.06

²⁰⁾これらの装置は、加速器とも言われますように、照射した物体には高電圧、高磁界、高圧力が生じ、必然的に音波、超音波、電磁波、X線も生じます。ただし、超短時間、高出力なパルス波を用いる必要があります。ページ7の脚注6)も参照してください。

1.3 ニューロフォンとの関連に関して

加害者が用いている装置は、パトリック・フナラガン博士が研究している、デジタル・ニューロフォンと同じか、或いは改良型である可能性が高まって来ました。しかし、現時点では、完全に断定する事はできませんので、その点に注意して頂きたいと思います。

私は、デジタル・ニューロフォンを見た事がないので、飽く迄も、被害者の会、ホームページに掲載されている翻訳を読んで、感じた事を書きます。また、独自にネット上を調べた結果では、ニューロフォンは、上手く機能しないと言う人が多い事も確かですが、聞こえる、とか、感じると表現する人もいます。ですが、デジタル・ニューロフォンに関しては詳しい情報が無いのが残念です。

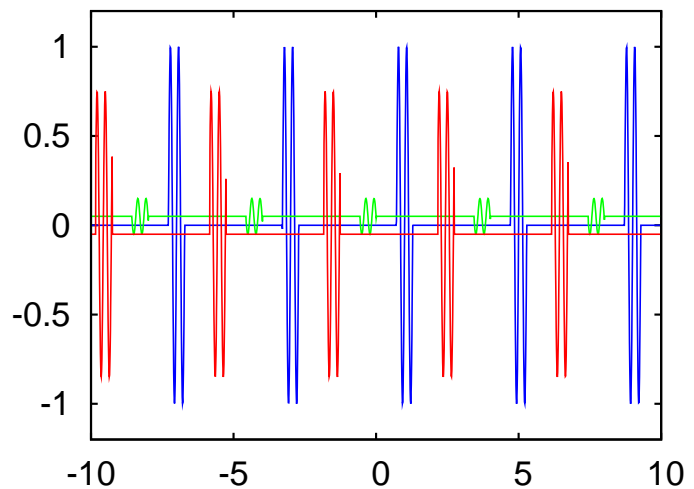


図 8: トーンバースト波形のグラフ

声被害を軽減する為に、高電圧源を用いて研究を行っていた所、ついに、音声被害を食い止める事に成功しましたが、その結果、推定される加害装置の内容は、驚くべき事に、デジタル・ニューロフォン²¹⁾その物なのです。被害者の会ホームページにあるニューロフォンの記述を参照して頂きたいのですが、その前に、信号強度に関して説明を補足しますと、以下のような事です。

図 8 のグラフは概念的なもので計測値ではありませんが、

- 青い線 犯人が被害者の人体に発生させている電圧 (最大値 1.0)
- 赤い線 防衛の為に発生させている電圧 (最大値 0.9)
- 緑の線 家電等の機器から発生している電磁波による電圧 (一般的な電磁ノイズ) (最大値 0.1)

と仮定しますと、

加害による信号と防衛による信号の比率は、 $1.11 \approx 1.0 \div 0.9$

一般的な電磁ノイズとの比率は、 $10.0 = 1.0 \div 0.1$

これを、デシベル (dB) に直しますと、それぞれの値は、約 0.915dB と 20dB になります。

そのデシベル差は約 19.085dB です。繰り返しになりますが、これは、説明の為に仮定であり、実測値ではありません。

人の感覚はリニア (直線) ではなく、対数関数的 (ノンリニア) な特性が有ると言われています。例えば、光の明るさが段階的に増加するとしますと、実際の明るさは指数関数的に増大します。写真に使われる濃度も対数変換により表されていますし、人の感覚器官はこのような感じ方をします。大きな桁を取り扱うには、デシベルと言う単位は非常に便利であり、有効に機能する分けです。

被害の調査で、実際に検出される電磁ノイズは、家電等から発生する一般的な電磁ノイズと比較して、その大きさはとても大きいです。しかし、厳密な値は、現時点では不明点もありますので公表は控えますが、推定可能な値としては、概算で数百デシベル程度と見積もる事が出来ます。

大きな音により、小さい音が聞き取り難くなる現象 (マスキング効果) がありますが、同じように電磁ノイズの場合も、その効果が明確 (知覚可能) であれば、同様の効果が生じるでしょうし、信号のダイナミックレンジが重要なカギとなるのです。

声被害を軽減する為に、作成した装置による電磁ノイズと、加害による電磁ノイズの大きさが近づくとつれ、防衛効果は増大する原理ですし、加害により生じている電磁ノイズは、かなり高出力なものと考えられ

²¹⁾被害者の会で翻訳した物を、私が、更に技術的な観点から注釈を加えたファイルがあります。

ますので、シールドを利用して防衛する場合、現時点の概算では、およそ、数百デシベルを超える減衰能力を持つシールドが必要だと予測できるのです。

それから、これまでの個人的な観測結果から、加害に用いられている電磁パルスで、人体に生じている電圧波形は、図8のグラフのような、トーン・バースト波と称される形状をし、50Hzの周期を持つ波形と推定しています²²⁾。しかし、他の被害者の調査を行っていませんので、情報収集の範囲を拡大して調査する必要がありますが事実です。また、被害者の人体に発生している高電圧変動は、高周波の電磁パルスにより発生したと推定される科学的な根拠が見つかりました。マイクロ波以上の周波数を持つ電磁波を用い、デジタル的にパルス変調した電磁波を、被害者に照射しているのでしょう。

音声は、聴覚器官により、電気的なパルスに変換されて脳に認識されますが、その信号は、位相変調²³⁾された電気パルス列です。パルスの時間的な間隔、並び方により異なる感覚が生じ、情報処理（認識）される事になります。デジタル・ニューロフォンを支える中枢機能として、周波数分析回路、位相変調回路、周波数合成回路が存在しており、これらが機能しない限り、デジタル・ニューロフォンは作動しないと、翻訳に、明確に書かれていますし、脳は、位相変調器、位相を認識するマシーンとも解釈できる内容となっています。

これが事実ならば、防衛装置により発生する、ランダムな電磁パルスが、高度に変調された位相を乱す為に、犯人の音声送信機は、機能を失うと予測できるのです。信号のダイナミックレンジを考慮した上で、この事が重要な要素になります。つまり、信号のダイナミックレンジと、位相（パルス列）の二つのカギがあると思います。

脳が取り扱う情報の中でも、位相が重要な要素である事が、医学情報からも多数得られますので、この二つのカギを信頼する事にしますと、位相に関する限り、複数の不可解な現象が観測されている事実と、この仮説が、実に良く符合している事を特記する事ができます。

被害者が録音した、音声波形を分析していて、判明した、人体に発生している奇怪な高電圧変動は、被害者が可聴している音声に、敏感に反応する、極めて特異な特徴を持っていますが、デジタル・ニューロフォンの翻訳の中にも、これと同じ様に、人体の特性変化に対して、自動共鳴するフィードバック回路に関する記述があります。犯人が用いている装置は、遠隔地から、これと同等の機能を実現している事になりますが、マイクロ波発生用真空管、極短時間テラヘルツ・パルス・レーザーを用いる事で、これらは可能だと推定できるのです。

加害に使われている電磁波の周波数を、推定可能な具体例を上げますと、体に、マイクロ波によると考えられる火傷を負わされた被害者の証言から、ズボンのポケットに入れてあった自宅の金属製のカギ（ダイキャスト製）が、”異常に熱を持っていた”との証言があり、この事からも、周波数は最低でも数十ギガヘルツ以上と言えます。（身体の火傷とカギの位置は、非常に近い位置にありましたが、この不可解な火傷に対して、診断書が得られた事実もあります。）

周波数が、25ギガヘルツ以上のマイクロ波を用いて、金属を加熱し、熱処理する事で、その性質を改善する加工技術が、工場等で広く使われていますし、確かに高周波でも金属を暖める事が出来ます。しかし、周波数によっては、金属を暖める事はできません。

もしも、加害装置がデジタル・ニューロフォンと同等の機構を持っていると仮定しますと、デジタル・ニューロフォンによる攻撃を防ぐには、同等の信号（電磁波）を用いる以外に、今の所、方法論が無いと言う事でしょうか。

しかし、理論的には、声被害を防ぐ為の、他の方法論（電磁波以外の）が考えられない分けではありません。（飽く迄も、予測の段階です。）

ニューロフォンの翻訳を見ますと、三次元のホログラフィックに関する記述があります。脳も同様の機構を持つ事が予測されていますが、これは、耳から入る情報が、音だけでなく、電磁波、超音波…等の皮膚への刺激によっても、音と類似の感覚が生じる事の根拠と理論付けている訳です。

²²⁾しかし、これ以外の波形の中にも、加害に用いられているものがあるかも知れません。

²³⁾時間幅変調、時間位置変調、デジタル的に位相変調された信号列。

脳の特性として、音の場合と同様に、電磁波によっても、言語野に反応が生じると言う研究は、インターネット上の医学情報を検索しますと、これに関する研究が確かに存在します。例えば、地震の時に地盤から出る微弱な電磁波に、言語野が反応すると報告されていますし、地震予知と言語野の反応に関しては、民営放送がこの問題を取り扱った事実もあります。高電圧放電による電磁パルスに対する言語野の反応は、科学者による研究対象となっている事は確かです。

耳からの刺激は、いつも同じ脳細胞を刺激するといった、固定的なものではなく、刻一刻と変化する脳の状態に対応した上に、更に、他の感覚器官（例えば皮膚）からの情報が、トータルに評価された結果、音が認識されるという事でしょうか。そう言えば、最近の高級オーディオは、耳に聞こえない超音波を再生する事で、自然な音感を得られるように細工されていますし、聞こえないはずの超音波を再生する事が、非常に重要な要素なのだそうです。この研究も、近年盛んに行われています。これらは、脳がホログラフィックなシステムだと言う証なのでしょう。

少々前置きが長くなりましたが、これらの事から予測できるのは、例えば、高出力な音波発信機を使い、適当な変調を施した音波パルスを、身体に照射する事で、声被害が軽減する事が期待されるのです。同様に、磁気パルスを直接、脳に照射する事でも可能だと予測できますし、何れの方法を採るにしても、適切な信号強度と、位相調整が要になりそうです。

これまでの仮説がすべて正しいと仮定しての話ですが、適切な刺激により、音声送信被害を軽減できる可能性があります。人体に対して安全を確認可能な防衛用装置を使用するのであれば、本質的ではないにせよ、被害を軽減できる可能性がある分けです。

それから、防衛の為に作成した、装置により発生する電磁パルスの、出力の測定結果を加えますと、トリフィールド・メーター用いた結果では、電界、磁界、マイクロ波モード、何れも指針が振り切れてしまい、正確な値は分かりませんでした。しかし、相当高出力な電磁波が出ています。意外な事は、磁界モードでも計測不能な程、大きな計測値が得られた事でした。

町工場から出ている電磁ノイズよりは小さいと考えられますし、通信の目的は無いです。その妨害の目的もありません。被害の軽減と、マイナスイオン効果が得られれば、それで良い分けです。

2007.12.10

1.4 音声送信被害と被害による振動感に関して

新たな発見

防衛機材²⁴⁾を使用中に気づいた現象として、重低音の ”響き ”、”うなり ”、のような振動感の変化に、特徴が生じている事に気づいた。

事実

- 音声送信被害²⁵⁾を受けている時、重低音の ”うなり ”のような振動感を伴う。しかし、防衛装置²⁴⁾ を作動させた状態では、音声送信被害の一時的な解消と共に、振動感も同時に解消する。振動感そのものの解消と言うよりも、その変化を感じ取り難い状態。つまり、振動ではなく、代わりに僅かな痺れを感じる。
- 大音量の音の再生 (ステレオ装置による) により、一時的な難聴状態にあっても、音声送信被害²⁵⁾ は一時的に減少する。しかし、振動感は消える事無く感じる。また、ステレオ装置の再生中も、激しい振動感があり、声と言うよりも、振動から、声のような感覚を得られると表現する方が近い。
- 音声送信被害²⁵⁾ の音量は、一定以上の音量には上がらないと感じる。それにも関わらず、とても鬱陶しく感じ、特殊な振動感を伴う。(重低音のうなりのような)
- 防衛機器²⁴⁾ の利用中、生活音等、普通に音や、声を聞き取れる状態だが、耳に独特な圧力感 (圧迫感) がある。気圧の変化による、鼓膜の痛みに似ている。しかし、耳の圧力感は絶えずあるのではなく、変化し、或いは、頭の締め付け感とも感じるので、音声送信被害²⁵⁾ とは直接関係しない可能性もあるが、連動している感じがする。しかし、重低音の振動感に関しては、明らかに、音声送信被害²⁵⁾ と連動している。

推定可能な事

- 低周波の振動感は、体に伝わった音波振動では無く、音声送信被害²⁵⁾ による電磁パルスに対して、言語野が反応する為、生じている可能性が高い。
- 防衛装置²⁴⁾ による電磁ノイズにより、脳内には激しいノイズが発生している可能性がある。
- 電磁パルスにより、言語野以外の脳波にも、影響が生じている可能性が高い。
- 防衛装置²⁴⁾ が発生する電磁ノイズにより、脳は、音声送信被害²⁵⁾ に対して、一時的な難聴の状態にあるとも予測できるが、しかし、防衛装置²⁴⁾ のスイッチを切れば、直ぐに音声送信被害²⁵⁾ を感じ取れる。この事から、大きい音の再生による一時的な難聴とは、明らかに異なる現象²⁶⁾ と考えられ、恐らく、パルス位相変調を用いた電磁波による、脳や、聴覚器官の刺激により、生じている現象の可能性が高い。

結論

- 音声送信被害²⁵⁾ と重低音のような振動感は連動している。全く同じ被害であり、音波振動によるものではない。
- これまでの観測と分析結果から、電磁波による、言語野の刺激による可能性が高いと考えられる。

解決法

- 危害を加えられている事を前提にした、脳波の測定、観測が必要。
- 音声送信被害²⁵⁾ による、電磁波の、正確な測定と分析が必要。

²⁴⁾高電圧源による、スパークとコロナ放電を利用したノイズ・ジェネレーター。防衛用に開発中の機器。

²⁵⁾特殊な技術を用いた犯罪行為により、本人が望まないにも関わらず絶えず聞かされている声の事。

²⁶⁾ステレオ装置を用いた、大音量再生音の可聴後、生じる一時的な難聴は、徐々に回復する特徴がある。

- 脳波と、電磁パルス、電磁ノイズの、相関を調べる必要が生じている。
- 脳に対して、電磁波を用いて、直接情報を伝播する、特殊な技術が用いられている可能性が高いことから、医学情報に関して、正確な判断を下せる人の、判断を必要としている。

特殊な技術を用いている事の根拠

- 加害装置に関する技術情報、医学情報等が全く存在していない。
- 加害装置を確認した被害者が存在していない。
- 一部の情報を除いて、科学的な証拠、根拠が存在していない。
- 普及（安価な）している測定器で計測不可能なレベルの、防衛用電磁パルスを用いる事で、音声送信被害は、軽減、又は停止する。しかし、脳波（思考？）盗聴に対しては、まったく効果が無い事が分かった。
- 山中、洞窟内などの計測結果から、電磁パルスの減少と共に、音声送信被害は、軽減、又は停止する事実がある。

2007.12.11

1.5 アンテナのサイズに関して

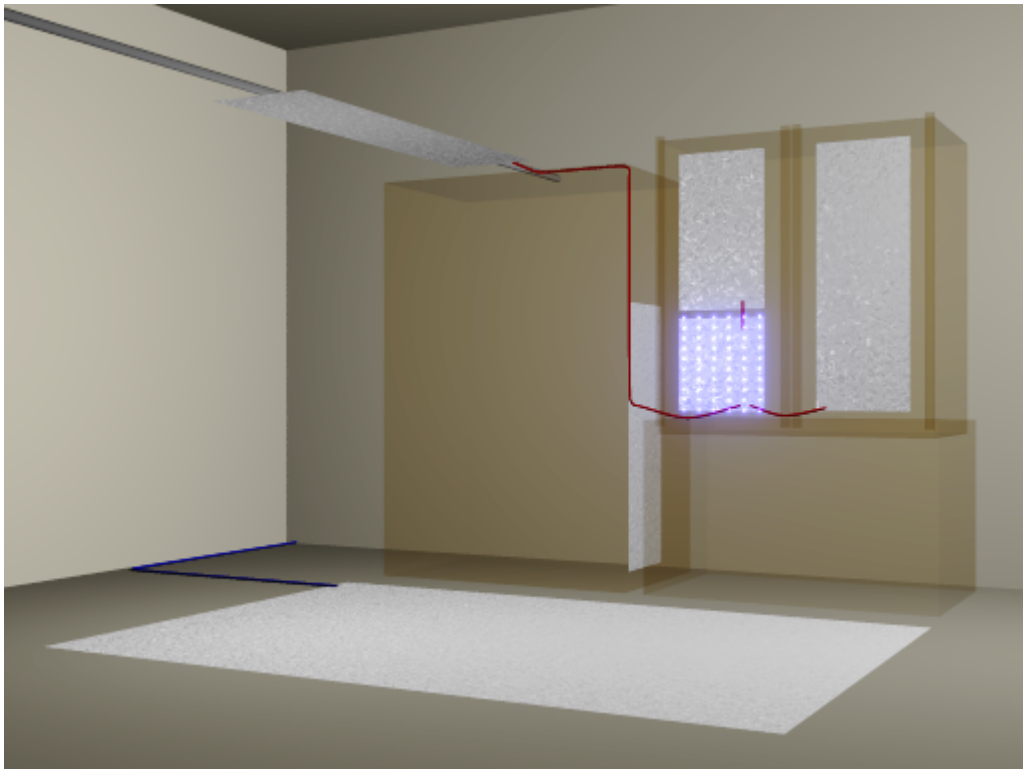


図 9: 設置状態

図 9 は概念図ですが、自宅に設置された防護装置の状態です。防護の目的は、これまで述べて来たように、音声送信被害の軽減にあります。手探りしながら、少しずつ改良を重ねた結果、このように装置されました。

右側の家具は、扉がガラス製になっており、中央から左右に観音開きするタイプの書棚です。ガラスの内側に、アルミ箔を両面テープで貼り付けてから、配線を施してあります。

画面のほぼ中央に、輝いている部分がありますが、これは、以前に説明しましたように、スリットを利用した放電ギャップで、左右から高電圧を加える事で、スパークを発生しています。このギャップの、ほぼ中央部分から配線を行い、高電圧を分配しています。高電圧の配線は、赤い線で表してあります。

高電圧分配用のアルミ箔の面は、オフセットを持った状態ですが、3軸方向を向くように工夫しています。

手前の床に敷いてある工作物は、複数の材料を、多重構造に重ねた伝導性のシートで、アースに配線してあります。

高電圧が加わった部分に、蛍光灯を近づけますと、発光が確認できます。昼間は分かり難いですが、夜、消灯後は、足元を確認する事が可能な位の明るさで、ランダムに瞬くように光ります。テスラーコイルを使った放電実験を、ビデオで見た事がありますが、これと類似の現象で、高周波の電界が発生している為に起きていると考えられます。

音声送信被害の軽減度は、体感的なものですが、かなりあります。激しいノイズ音と共に、低周波の振動感は、かなり減衰し、思考を妨げる、思考の復唱被害も、問題ない程度に軽減されています。作業を行うのが楽になりました。感情の状態も、とても安定しています。

2007.12.17

1.6 メモ

音声送信被害の軽減を試みっていますが、高電圧源の電圧を上昇する為に、スパーク・コイルの後に、更に、追加コイルを接続する事で、発生する電圧を上げる事が可能だと分かりました。

発生する電圧は、非常に高周波の振動を伴うようになり、より強力な防衛能力（声被害の軽減と精神の安定）を発揮します。

音声送信被害の軽減と共に、盗聴機能にも影響が出ている事が明確に分かります。

しばらくの間、殆ど被害を感じ取れない事も、幾度となくありましたし、この状態を望んだ時に得られるのですから、確かな事です。しかし、残念ですが、連中も何らかの対策（チューニング）をするのでしょうか。徐々に被害が戻ってしまいます。

この事から、連中が使用している機器の機能を奪う事ができれば、この被害は解消すると断言できます。つまり、脳に損傷を負った為に声被害が生じている分けではなく、あくまでも電磁パルスの照射によって声が聞こえると言う事です。

この事が判明しただけでも、救われたと感じています。

非破壊検査の方法論として、現在、レーザーによる、原子炉内の超音波検査が実用化されている。二種類のレーザーを使用し、それぞれのレーザーを、二本のガラスファイバーを経由して工作物まで導く。検査工作物に対し、パルス・レーザーを照射すると、レーザー・アブレーションにより強力な超音波が発生する。もう一つのレーザーを用いて、レーザー光のドップラー偏移から超音波を検出する。この方法は、現在、原子炉の圧力容器を検査するために実用化されている。

同じ原理の利用として、テラヘルツ・レーザーを使用して、コンクリートを透過して、室外から、室内の人物や工作物に対して、超音波振動を与える事ができる。この超音波を、検出用に用意したテラヘルツ・レーザーにより、ドップラー偏移として検出する事で、微細な振動、マイクロ・バイブレーションを検出できる原理になる。

脳内のマイクロ・バイブレーションを検出するのに都合のよい方法論と思われる。テラヘルツ波が、脳内深層部に直接作用するには、相当に大きな出力を必要とすると考えられるが、頭部の浅い部分で、超音波が発生する事を利用すれば、超音波エコーを利用して、脳内を隈なく検査可能と考えられる。原子レベルは無理としても、細胞レベルの振動を検出する事は容易い原理となる。

併用可能な方法論として、スペクトラム拡散の技術がある。原理としては、従来から使用されている、ロックインアンプ（同期アンプ）の原理と同種のものであり、更に、高性能な信号分離能力を有している。この原理を併用する事により、小さな出力の、超音波振動を、長時間の相関処理により、安定したインパルスに変換する事が可能であり、マイクロ・バイブレーションの、ドップラー偏移を検出するのに都合の良い方法と考えられる。音波の計測で、スピーカーなどのインパルス応答を計測する際に用いられる、M系列ランダムを利用した計測技術と同じ原理となる。

心の声は、脳内ニューロンが発生する電氣的なパルス列によって生じる。しかし、脳は、聴覚からの電気信号（パルス列）を理解し記憶する。この事から、心の声の正体は、聴覚からの電気パルス列が符号化されたものと考えられる。

すべての聴覚記憶がこの原理に従うはずで、脳は、聴覚からのパルス信号意外に、音の情報を得る方法がないのだから当然と考えられる。

電気パルスが生じれば、物理的な振動（音波）が必ず伴うし、この振動は、心の声を含んでいるはずで、簡単な復号化により、可聴可能な音声に変換できると考えている。少なくとも、聴覚で発生するパルス列と同じ信号を復元する事ができれば、音声化は容易い原理となる。

テラヘルツ・パルス・レーザー（赤外線的一种）を用いて、PWM変調（適当なパルス変調）により、聴覚の有毛細胞や、或いは、脳内言語野に、パルス状の音波振動を発生する事は可能であり、聴覚野、聴覚言

語野を刺激する事ができる。この刺激により、確率的に、ニューロンの発火率に影響がでると予測できるし、確率共鳴との併用により、聴覚言語野が認識可能なパルスを生成可能と予測している。

照射するテラヘルツ・パルス・レーザーの出力を上げる事により、レーザー照射面を、超高電界、高磁界、高圧力状態にする事が可能²⁷⁾であり、プラズマにより、照射表面の数原子層を一瞬にして吹き飛ばす事もできる。細胞をショック状態にする事は容易いと言える分けて、パルス列の適用により、脳に情報を伝播する事はできると判断している。

パルス・レーザーを、パルス位置変調（位相変調）し、物体に照射する事により、1ビット・アンプの原理で、任意の音声（音波振動）を発生する事ができる。テラヘルツ・パルス・レーザーの場合、可視光レーザーと異なり、物体での吸収率が違う為、吸収率の小さい物体は透過してしまうが、それ以外は、可視光レーザーと同じ現象を引き起こすと考えられる。

以上の物理原理と仮説を、トータルに評価する事で、遠隔地から、聴覚野に任意の電気パルス列を生成する事が可能であり、また、脳内の電気パルス列を検出する事が可能と考えられ、これにより、心の声を、脳内の振動の検出という形で盗聴可能（思考盗聴）と判断している。

²⁷⁾高出力、短時間のパルス・レーザーにより、プラズマを発生可能であり、レーザーの照射面を、数原始層、吹き飛ばす事も可能。